

障害・疾患を有する家族と暮らす子どもの支援に係る臨床心理学的研究：ヤングケアラー支援の観点から

藤田，由起

<https://hdl.handle.net/2324/7363551>

出版情報：Kyushu University, 2024, 博士（心理学）, 課程博士
バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



氏 名 : 藤田 由起

論文名 : 障害・疾患を有する家族と暮らす子どもの支援に係る臨床心理学的研究
ーヤングケアラー支援の観点からー

区 分 : 甲

論文内容の要旨

本研究では、ヤングケアラーをはじめとした障害・疾患を有する家族と暮らす子どもに焦点を当て、彼らにとっての「自分らしい生き方」とは何か、彼らが「自分らしく生きる」ためにどのような支援が必要であるのかについて知見を得ることを目的とした。

第2章では、障害・疾患を有する家族と暮らす子どもへの心理・社会的影響に関する基礎的な知見を得るために、量的研究を中心とした基礎的研究を実施した。

第1節では家族へのケア役割を担いつつ幼少期を過ごした人々のケア役割や家族関係についての認識の違いが、精神的健康に及ぼす影響について検討する幅広い知見を得ることを目的として質問紙調査を実施した。その結果、ケア役割を担う子どもが経験しうる心理的負担は、単にケア役割の量的程度に左右されるのではなく、ケア役割への主観的評価や母親・きょうだいとの関係性といった複層的な家族構造によって影響を受けることが示唆された。特に、母親の子どもに対する配慮性や、きょうだいとの親密な関わりが、そのような子どもの精神的健康に関連することが推察された。

第2節では、精神疾患の母親と暮らした経験がある人々に焦点を当て、彼らの学齢期における家族関係やケア役割の程度が精神的健康に及ぼす影響に関する知見を得ることを目的として質問紙調査を実施した。その結果、家庭でのケア役割の程度が高い場合、家族との関係性が両価的かつ共依存的なものになるリスクがあり、社会からの孤立感を抱えた中で悩みや不安を抱え続け、精神的健康に否定的影響を受ける状況に陥りやすいことが示唆された。

第3節では、障害・疾患を有するきょうだいをもつ人々を対象として限定し、彼らのきょうだい関係の認知など、内的体験や対人関係等への影響について知見を得ることを目的としてインタビュー調査を実施した。その結果、障害・疾患を有するきょうだいがいる人々は、きょうだいとの関係から、自身の生活や考え方、対人関係に対するポジティブ・ネガティブ両側面の影響を受け得ること等が示唆された。

そして、第4節では、学齢期に精神疾患の家族と暮らした経験が青年期の精神的健康やキャリア意識に及ぼす影響に関する知見を得ることを目的として質問紙調査を実施した。その結果、精神疾患の家族を有する子どもは、本来であれば学業や家庭外の社会との交流などを通して、充実感を得たり、成長したりする時期に、そのような体験が制限されることを実感しやすい一方、キャリア意識やアイデンティティに必ずしもネガティブな影響ばかりを受けるわけではないと示唆された。

次に第3章では、障害・疾患を有する家族と子どもを支える立場である家族成員への心理・社会的影響に焦点を当てた。具体的には精神疾患患者の配偶者を対象とし、彼らが認知する自身の精神的健康及び夫婦関係・親子関係の関連について検討することを目的とした質問紙調査を実施した。その結果、患者の精神症状に関する子どもとの話し合いの程度が良好な夫婦関係や子育てへの自信

に繋がること、良好な家族関係が彼らの生きがい感に繋がることが示唆された。

第4章では、第2章・第3章の基礎的研究を踏まえ、ヤングケアラーや障害・疾患を有する家族と暮らす子どもの内的体験についてより詳細な知見を得ることを目的とし、質的研究を実施した。

第1節では、第4章において扱う事例について概説した。

第2節では、同胞の不登校やひきこもりを主とした家族の心理・社会的ニーズから、ケアを担うようになった経験を有する成人の内的体験に焦点を当てた。その結果、同胞のニーズがそのきょうだいにも大きな心理・社会的影響を及ぼすこと、子どもがケアを担う状況に対する周囲の大人の態度がヤングケアラーの葛藤を深めること、「ケアをしない」という選択も含め、ヤングケアラー自身の主体的な選択を尊重することが「自分らしい生き方」に繋がることなどが示唆された。

第3節では、明確な診断を有する家族以外にも障害・疾患を有する状態に類する家族に囲まれ、その中でケア役割を担いながら過ごした経験を有する成人の内的体験に焦点を当てた。その結果、セルフ・スティグマからの脱却がヤングケアラーの生き方の変容に繋がること、これまでの自分を否定したり、否定的捉えを無理に肯定的捉えに変えていったりするのではなく、自身のあらゆる側面や捉え方を受容・肯定できるように後押しすることが「自分らしい生き方」に繋がることなどが示唆された。

第4節では、子どもの頃にケアを担い、時には葛藤を抱えつつも、おおむね一貫して健康的で前向きな生活を送ることができたヤングケアラーの経験に焦点を当て、ヤングケアラーとしての健康的な生活に繋がる要因について検討することを目的として研究を実施した。その結果、ケア役割を担いながらも子どもが健康的かつ前向きに生きていくために必要な要素として、ケアの受け手やもう片方の親との親子としての関わりが継続的にあること、他の家族と協力しながらケアを担える環境であること、家族外に家族の状況を話せる存在がいることなどが示唆された。

最後に第5章において、本研究の目的に沿って総合考察を行った。障害・疾患を有する家族と暮らす子どもやケア役割を担う子どもにとっての「自分らしい生き方」とは、「十分に機能した人」(Rogers, 1961)として生きることや、時間的展望を確立させて生きることだと考えられた。このような考え方に基づき、彼らが「自分らしい生き方」を実現させるために必要な支援についてまとめた。